「薩摩が生んだ国際人」と西南戦争 ―その一―

長谷川　宏

はじめに

平成四年九月十一日から十月十一日まで、黎明館企画特別展として「五代友厚・寺島宗則・森有礼―近代日本につくした鹿児島人―」が開催された。この特別展には、東京国立博物館、国立国会図書館、横浜開港資料館、逓信総合博物館、大阪商工会議所、佐賀県立博物館、福沢旧邸保存会（福沢記念館）、尚古集成館、鹿児島県立図書館など数多くの博物館や関係諸機関の協力をいただき、三人の人物像や思想を不十分ながらも紹介することができた。

そして、この特別展を通じて、図録論文に寄稿していただいた犬塚孝明氏は「薩摩は外洋に向かって、大きく懐を開いた国である。その特異な地勢が往古より薩摩の人々の眼を異国へと惹き付けてきた。戦国期のイスパニア船やポルトガル船の来航から、近世における琉球貿易に至るまで、鎖国時代を通じて薩摩の人々は常に異国を意識して生活してきたように思う」と述べられ、このような歴史的背景の中に登場した三人を「国際人」と評価された。さらに、マスコミ関係者やその他数多くの方々からも同様の評価を得、この特別展の意図の一つがかなえられた。

ところで、この三人の人々は、近代化政策をすすめる明治政府にとって国内最大の内乱であった西南戦争に、どのようにかかわったのであろうか。直接かかわらなかったとするならば、同郷の人間として、どのように見ていたのであろうか。本稿の目的を、ここに求めてみたい。実は、この点は、今回の特別展では余り明白にできなかったことである。まず、彼らの「国際性」の芽がどのようにして培われたかを考え、次に明治十年やその前後の動向を通して、彼ら国際人が西南戦争をどう見ていたか考えてみたい。

一、三人の「国際性」

三人の「国際性」の芽生えについて考える時、彼らの生育環境、藩校造士館で学んだという教育環境、そして、慶応元（一八六五）年の薩摩藩英国留学生の派遣にはじまる外国視察による知識などを忘れてはならない。

まず、五代友厚は天保六（一八三五）年、薩摩国鹿児島郡城ケ谷村（現在の鹿児島市長田町）に生まれ、父・五代直左衛門秀堯は、薩摩藩の儒臣で、母は本田氏の出身でやす子である。秀堯は、漢文学・仏教書に造詣が深く、藩主島津斉彬の信任厚かった人物で、福昌寺を建立した島津元久の碑銘は秀堯の揮毫になるといわれ、又、薩摩・大隅・日向の地理・歴史を記した『三国名勝図会』の編纂が藩主斉興のころから始められるが、その編集者でもあった。斉彬から世界地図の模写を命ぜられ、それを友厚（幼名徳助、のち才助とよばれ、明治三年頃友厚と改名）にさせたという話もつたわっている。

嘉永六（一八五三）年、五代十九才の時父の死にあうが、この年六月

には、ペリーが浦賀に来航、この事件は外国に対する五代の認識に大きな影響を与えた。翌安政元(一八五四)年、藩の郡方書役となり、この頃には外国との交渉の必要性、極端にいえば開国論をもっていたようである。安政四(一八五七)年には、開明的な藩主斉彬の命により長崎に遊学する機会にめぐまれ、長崎海軍伝習所に伝習生として入所した。この伝習所は、オランダが幕府の軍艦・鉄砲などの注文とは別に、安政二年に蒸気船スームピング号を日本に寄贈し、日本人に航海術を教える意志をもっていることを通告してきたことにより開かれたものである。幕府は、安政三年七月に正式に伝習生を長崎に派遣し、伝習方目付として永井尚志、伝習所主務者として長崎在勤中の御勘定格徒士目付の永井享次郎を任命した。江戸からは、矢田堀景蔵と勝麟太郎(海舟)とが派遣され、伝習生の幹部となった。

安政四年のころには、熊本、福岡、萩、佐賀、津、福山、掛川などの諸藩士が入所しており、薩摩藩からは木脇賀左衛門、沖直次郎、本田彦次郎、川南清兵衛、鎌田諸右衛門、加治木清之丞、磯永孫四郎、税所篤敬、川村純義、五代才助など十六名が入所していた。この伝習所で、五代は勝と出会い、勝の「外国との積極的な交易をし、その財力で海防力を強める」という考え方にふれる。開明的な藩主斉彬の感化と相まって、五代の世界観は大きく広がったと思われる。安政五年(一八五八)年七月、斉彬の死去により帰国を命じられるが、翌年には藩命で長崎に再び遊学、堀孝之、岩瀬公圃、永見伝三郎らと交わり、外国事情を吸収した。斉彬という人物と長崎という土地が、五代を開国論者に育てあげた。

次に、寺島宗則は、天保三(一八三二)年、薩摩国出水郷脇本(現鹿児島県阿久根市脇本)に生まれた。父は郷士長野祐照で、母は高尾野の郷士八田利右衛門の娘・秋野である。父はもともと郷士松木家の出身で長野家へ養子に入ったものである。寺島は幼名を徳太郎といい、五才の時伯父松木宗保の養子となり松木家を継いだ。養父宗保は、出水郷の医師芳村雲昌に師事し医術を学び、その後長崎で西洋の外科医術に目覚め、長崎では文政八(一八二五)年、島津重豪の命により、出島のオランダ商館医であったドイツ人シーボルトについて、西洋医学を学ぶ機会にめぐまれ、藩の奥医師となったほどの人物であった。宗保は、五才で松木家に養子として入った宗則をつれ、長崎での蘭学修行に向かうことになった。幼い宗則は、西洋の化学・医学研究に日夜とりくむ父宗保の情熱を感じ取ったと思われる。

天保十四(一八四三)年、帰藩を命ぜられた父とともに鹿児島へ帰った宗則は、翌年藩校造士館に入学、その翌年松木弘安と改め、松木家の家督を相続した。寺島と称したのは、明治になってからである。嘉永四(一八五一)年には、島津斉興の広敷医を命ぜられ、安政元(一八五四)年には斉彬に供奉して江戸に向かい、安政三年には幕府の蕃書調所出役教授手伝に任ぜられた。このころの寺島について、長崎海軍伝習所のオランダ士官ファン=カッテンディーケは『長崎海軍伝習所の日々』という日記の中で、俊才としての寺島を特記している。すでに、蘭学の修得が相当になされていたものと考えられる。安政四(一八五七)年、斉彬の侍医に任ぜられ、いわゆる集成館事業とよばれる大近代化政策に参加し、西洋の文明技術がどのようなものであるかを身をもって知った。製鉄・造船・電気通信・写真等のどれもが、寺島の知識欲をもり上げたと

いえる。

こうした寺島に、やがて蘭学より英学の必要性を痛感させる大きな状況が生まれた。その理由は、欧米列強との和親条約締結により、鎖国体制が崩壊し、開国によって開始された貿易が、世界の資本主義体制の大きな波をもたらしたことによる。安政六（一八五九）年、寺島は外国奉行手附翻訳方の藩命を受け、横浜村勤務となり、出入りする貿易商の多くがイギリス人・アメリカ人であった。このことが、寺島に本格的な英語学習への取組みをさせたわけである。

和親条約締結の後、大老井伊直弼によって無勅許のまま、修好通商条約が結ばれるが、桜田門外の変で井伊が暗殺され、又外国人への殺傷事件が跡を断たなかったため、幕府は文久元（一八六一）年、各締結国に対し開港開市延期に関する通告をし、あわせてヨーロッパへ交渉のための全権使節を派遣することにした。寺島はこの使節団の一員として、箕作秋坪とともに傭医師兼翻訳方に任命された。この時、傭通詞として選ばれた福沢諭吉がおり、ともに英学の才能を評価されての派遣であった。寺島は、病院・学校・会社・工場など西洋文明の本質を肌で感じ、特にロンドンではその文明度の高さに驚嘆したと言われている。

もう一人、森有礼は弘化四（一八四七）年、五代と同じ薩摩国鹿児島郡城ケ谷村（現鹿児島市春日町）に生まれた。森家の出自ははっきりしないが、父・森喜右衛門有恕は和歌・詩文をよくした人物で、母は隈崎氏の出身で阿里という名である。阿里は、決断力に富み信念を曲げることを極端に嫌った人といわれ、森はその母の感化を強く受けている。この三人の中で、最も幼くして外国勢力の接近を身近に感じたのは、この森であることは言うまでもない。ペリーの浦賀来航という大事件は、七才の少年の目にどのように映ったのであろうか。おそらく、同じ郷中（城下の武士団を居住地に従って区割し、その区割りごとに青少年の教育的集団を設けたもの）にいた先輩の五代友厚から大きな影響をうけたと思われる。犬塚孝明氏は、「森と西洋とを結ぶ最初のきっかけをつくったのは、五代友厚である」とされている。

少年時代の森について、もう一つ特筆すべきは、安政五（一八五八）年十二才の時に、藩校造士館へ入学していることである。

実は、五代も寺島も十二才の時造士館に入学しているのであるが、森の入学した頃の造士館は、藩主・斉彬の文武奨励策によりこれまでの偏固な学風を変質させていた。

藩校・造士館は演武館とともに島津氏二十五代重豪により創設され、儒教を尊び士気を振起する教育制度を目指したものであった。それ以前に、十九代光久は宋学を如竹に学び、林羅山や家老・伊勢貞昌の勧めで文教政策をすすめていたが、藩校創立の計画は実現しなかった。当時、薩摩藩では宝暦の治水工事以来、財政窮迫のあおりで幾多の非難や反対があったが、重豪の実行力が藩士教育の場をつくりあげたのである。江戸の昌平黌をまねた構えで建設され、当時各地に設けられた二百余の藩校の中でも岡山の閑谷学校、米沢の興譲館、佐賀の弘道館、萩の明倫館、熊本の時習館、会津の日進館、水戸の弘道館とともに、学問は大いに盛えた。教育方針は、昌平黌や各藩校と同じく、修身治国の道をきわめる儒教主義で、教科の中心は朱子学であった。異学や新説はきびしく抑えられ、規定以外の書物を読むことは許されなかった。

藩主斉興が登場したころ藩財政は窮乏の極に達し、造士館の学風もふるわなくなり、本来の主旨である人材養成もその本質を失ってしまった。しかし、その後の藩主斉彬の治政によって、造士館をめぐる教育政策は大きく前進することになった。斉彬は、安政元（一八五四）年、学問に対する自分の所見を述べた訓示を、造士館の正庁に掲示し士気を鼓舞した。

学問の大本　　安政元年正月二十日

学問の儀文章訓話の末になづみ倫理実用の道理に昏く候ては不学無識の者に同じく無益の事に候。元来学問の本意は義理を明かにし心術を正し己を修め人を治むる器量を養ひ君父に対して忠孝を尽し全体を汚さざる儀第一の要務と存じ候間能々申し諭すべく候。武道の儀も同様武術の末流に拘らず匹夫の勇に堕せず行儀を正し士道の本体を失はざる様厚く申し渡すべく候

又、斉彬はあらゆる機会をとらえて、学問の本義について、「単に文章の事を研究し、表面の意味や解釈を論議するだけでは、真の学問をいうことはできない。実際にそれが活用され、人間の生きる道に役立つようにしなければならぬ」と説いている。又、斉彬は造士館を視察したり不時に造士館の生徒を召集して面前で読書や講義をさせたり、問題を与えて試問し優秀者には賞を与え、又側近の家臣に登用したりしたといわれている。

斉彬は、さらに安政四（一八五七）年自筆の十ケ条の訓示を出して、「広く世界に目を注がなければ国政を進めることは不可能である。これからは外国との通信も許し、広く世界と交通すべきである。ついては、国体をたて、かれの長所を取りわが短所を補い、武備を厳にし、船舶の便をよくし、外国に乗り出して交わるように国威を張ることが第一である。そうすると自然に皇威が世界に輝くようになる。このような目的で学問を広め、教えの基を立てたい」と述べ、この考え方によって造士館の学風は一変して、世界的視野をもった人材の養成がさけばれることになった。

森が造士館に入学した年に斉彬は急逝しているが、少なくともこうした斉彬の思想の影響を森が受けたことは確実である。斉彬のあと藩主となった忠義は、新たに学令を出し「学術の事は、斉彬奨学の趣旨にたがわぬよう天地の大道に立って人倫を明らかにし、太平になれて文武の本体を汚し人道を失うことのなきよう」と戒めていることからも明らかである。

ところで、斉彬の急逝によって中央政局や藩政が大きく動揺する中、森を洋学への志にかりたてたのは、林子平の著『海国兵談』であった。海国日本の沿岸防備の必要性や戦術を説いたもので、海外事情を熟知する重要性を痛感したのである。文久元（一八六一）年から、上野景範のもとで英学を学び、元治元（一八六四）年に創設された薩摩藩立の洋学校「開成所」には、英学専修生として入所した。英学専修は、蘭学専修に比し少人数であったが、この英学専修が森の人生を大きく開いたといえる。

二、英国留学生の派遣

三人の「国際人」の軌跡をたどる時、むろん五代の上海渡航や寺島の文久遣欧使節団参加を忘れてはならないが、最も大きな意義をもつのは慶応元（一八六五）年の英国留学生の派遣である。それは、帰国後の彼らの業績をみれば明白である。

留学生派遣の実現のきっかけは、五代才助の「上申書」であるが、これはもともと前藩主斉彬の遺志であり、富国強兵策を進める薩摩藩にとって重要政策であった。この留学生派遣計画は、開成所教授であった石河確太郎によって開成所を母胎とした具体論として展開され、島津久光側近の大久保利通を通じて建言したことにより実現した。この留学生派遣という大事業は、藩の将来の方向づけをなすものであったといっても過言ではなく、藩をあげての組織的計画の下に大量の留学生が派遣されたこと、一行の留学経験がその後の日本の近代化のためにこれほど有効に生かされた例が他にないこと、留学生達が高い志と広い視野をもち渡航後は時には藩の指示や援助を待たず、自己の使命を自覚し、主体的に海外生活の体験を重ねたことなどが高い評価を得ている。

五代友厚上申書（『薩摩海軍史』中巻）

私事今般重罪を奉犯候上、一旦亡名（ママ）に似候所業に及、愚存奉申上候も重々恐入候得共、御国家の御為、当時天下の時変、機応御所置、不奉顧万死、左に申上載候。

五州乱れて如麻、和すれば則盟約して貿易を通じ、和せざれば則兵を交へて互に其国を襲ひ奪呑す。右は是則地球上一般の風俗天数の然らしむる処、如何ともする事不能。開成強大の英仏の如きも、鎖国の行業難立形勢に罷成申候処、御開港以来勤王攘夷を唱へ、天下に周旋同志を集め、自国の政を掌握する様の大言を吐き愚民を欺迷し、其上口演にのみ走り、浪士共増長いたし、攘夷の功業不成を不知、国政を妨げて反て内外の大乱を醸し出し、自滅を招くの兆、嗚呼可歎。皇国御興廃此為に可有御座、勿論国体を患ひ攘夷を唱候志は、甚以可賞愛候得共、惜かな、当時地球上の道理に暗く、我を不知、彼を不知、不成を不知は至愚にして、危急切迫は自成する処、如何に蒙昧愚鈍とは言へ、右は東印度近くは清朝の覆轍を踏ながら、国体を患ひ終に国体を失ふの基、歎息の甚に御座候。頻に西洋諸国と雖ども、或は鎖国或は開国、終に其理を実験研究して富国強兵にし、大に開成して天下を横行するに至り申候。

（中略）

一英仏両国へ遊学人数数拾六人

内四人は追々御家老職にても被仰付候（家老の内御人撰）。弐人は御軍賦役の内より御人撰。

三人は攘夷説を唱候壮士の内より御人撰。

右人数は英仏の軍務・地理・風俗、巨細に見分いたし罷帰り候様被仰付度奉存候。

一人は郡奉行の内より御人撰。

右は英仏の農業耕作の相用候機械、国々相用弁不弁を取究、相

誂候様被仰付度存候。
弐人は、台場・築城・砲術に相心得候者御人撰。
右は英の砲台・築城並大小砲製造の大意を注目いたし、罷帰候様被仰付度奉存候。
一人は造士館の内より御人撰。
右は英仏諸学校並病院・幼院・貧院等の所置研究致し、罷帰候様被仰付度奉存候。
三人は細工並機械取扱、且絵図面を達者に写候者御人撰。
右人数は我国要用の者と見受候はゞ(に付)、其取扱並絵図写し罷帰候様被仰付度奉存候。

（以下略）

三、大久保利通とのかかわり

三人は、明治政府の近代化政策の推進者大久保利通につづき、経済・外交・教育の分野で近代日本の建設につくした人々であることは周知のとおりである。様々な場面で大久保とかかわり、影響を受けている。三人の生き方や思想を考える時、大久保との関係をぬきにしては語れない。そして、この大久保こそ、やはり今回の特別展の図録論文に寄稿していただいた芳即正氏によって、「大久保は島津斉彬の遺志の後継者である」と評価された人物である。「斉彬が必要性を感じとっていた統一国家日本の殖産興業政策の最初の責任者は、大久保であった。大久保は一年半余の欧米視察で大きく目をひらかされた。かつて青年時代その意義をつかめなかった集成館事業が、深刻な反省をもって思い出され、国家の前途について重大な使命感をいだいたであろう。」とする氏の見解は、大変示唆に富むものである。三人の「国際性」を考える時、こうした大久保という人物の影響も見過ごすことはできない。

四、三人と西南戦争

では次に、五代、寺島、森この三人の人々は西南戦争とどうかかわり、又西南戦争をどう見ていたかを考えてみたい。結論から言えば、この三人には「西南戦争論」というようなまとまったものは存在しない。そこで、まず現存している明治十年の書簡類を中心に検討してみたい。ただ、紙数の関係で、ここでは五代関係の資料を紹介することとし、具体的な結論づけは、次稿になることを御了解いただきたい。

資料1　五代友厚書簡大隈重信宛

追日、薄暑を催候処、御多祥御奉職可被成御座、欣喜奉恐賀候。随て、迂生ニも、無異消光仕候間、乍恐、御放念被下度候。然ば、今般、久々振御下の処、甚御麁情、積年の労を慰ニ不足、背本懐申候。何卒、御海恕可被成下候。扨、西南の景況は、弥、官軍連勝の雷報(電)、御同慶不少。此勢ひニては、最早、格別長も相掛間敷、御出立前より、種々御配慮被為在候南方の挙動、何れ戦端を開ニ至り可申か。併、日本政府は、今、造化、僥倖を与、開運を助ク、内は、左右の大奸を除キ、外は西南の大患を静定せしむ。四の舞迄も、必ズ、此一挙ニ一洗せしむるならむ、と観念仕候。御配慮被成下候藍一条も弥、此節の試験勝利を得、即、今日より別紙の通、広告仕候間、御同慶被下度。支那ニも一名差遣置候間、次便迄ニは、吉左右相分可

申候。御婦東京後、座上の御楽は、如何候や。当秋登京の節ハ、御手伝可仕候間、只今より楽居申候。尓後御無沙汰申上居候付、御伺旁恐々奉得尊意候也。

六月一日（明治一〇）　松陰生

重信様　侍史

資料2　石川舜台書簡森山茂宛

御多祥奉賀候。扨、西南も、追々、鎮静に付てハ、過日も一寸申上候通り、麑城ニ施薬院を開き、布教ニ着手し、且救助を致し度ニ付、考フルニ、同地ハ、予て、米ニ不足なる地のよし。別して、本年ハ、穀類の不登、可知と存候。然ルニ、我檀家中ニハ、米の多き国多し。故ニ、同教の徒を、救助せよといふを以、説諭せバ、随分、一廉の用ニ立ツ様ニ、集るべしと考フル也。尤、募集するにハ、教正の分か、法主の子弟が、巡回スルヲ可とする也。（尤、分明ニ、其地方へ上申シテ、一合一勺ト雖、ホメテモラハネバナラヌ。只ニ私ハセヌコト、請合也。）是ハ、内務カラ、九州へ布達してもらふたよふな、都合ニハいかぬか。漫ニやると、又、地方官吏等が、なんのかのと、やかましくいふべし。如何であらふか。よろしいといふ御見込ニ候ハヾ、松陰君とも、御談被下度。尤、過般の九州地方へ、布達してもらふた辺よりいへバ、金穀・器具といふ一部分内、さしつかへハなかるべし、とハおもへども、御考被下度候。且、之を施行すると、其為ニ、西南暴動の次第を、自ラ下民ニ説諭も出来、又、人間共救の義務ある事も、しらせらるゝなり。随分、政府にも、損ハいかぬ事と存候。至急、御批回被下度奉願候也。

八月七日（明治一〇）　舜台（石川）

森（茂）山老兄

資料3　北畠治房書簡五代友厚宛

朝夕ハ、稍、暑熱相磷候処、倍、御清穆被為渡、恭賀ノ至ニ奉存候。二ニ、弊生瓦全、以御庇陰、奉職罷在候間、是又御放念可被下候。陳者、過日伊丹判事へ御付托ノ雲箋、当時直ニ相達、敬読仕候処、桐陰先生御地ニ御留置の情由、委詳御示教、猶且、利害相央スルノ御高諭、逸々敬服仕候。蓋シ、サキニ、桐陰先生へ一ポン仕置候ハ、已ニ御地ニ留マラルヽト云ニ決シタルガ故ニ、夫モヨシトシテノコトナレバ、素ヨリ贅言ニ属スル如シト雖ドモ、其已ニ朝陽館中ニ従事セラルヽニ就ハ、御双方ノ為、猶、一層ノ注意アリテ、館ノ栄昌ニ、障碍ナカランヲ欲スルノ衷情ニ出デシハ、御明察モ被成下候半カ。余計ノ悪マレロヲキヽシモ、例ノ素直ノ赤心ニ出シコトニ候ヘバ、御序ノ節、桐陰先生へも、宜御通諭奉希候。

一　昨十二月中、飯田町邸御買与被下候処、今春来、西南ノ大変ヨリ見合居候ニ、熊本連絡相通ジ、戦ノ数已に相見候ニ付、六月より営繕ニ取掛リ、別紙図面ノ通リ、不日出来上リ可申ニ到リ候ニ付、大体ハ、来九月中旬、相移リ可申積ニ略相決シ申候条、乍憚、御展覧可被下候。扨、右営繕ハ、本家ノ分九百廿弐両（ママ）五十銭ノ落札ニテハ、土蔵ノ分ハ三百円、合テ一千弐百廿弐円五十銭ニ有之候処、請負人ニテ、大ニ見込違致候趣。右代価ニテハ、殆五百円ノ損毛ニ相

成由ニテ、営繕手間取、夫故、成就モ、意外延引ト相成候事ニ御座候。且又、右邸ノ裏尻ニ、川端トイヘル官員一家、其隣家宮島書木（ママ）官ノ家所、去ル三月廿一日、大風雨ノ夜焼失。此時弊家ハ風下ニ相成、必定類焼スベキニ、奚ンゾ図ン、中二階ノ下ナル梧桐一本ノ延焼ニ止リ、全屋無難ニタスカリ、人皆、天幸ノ甚シキコトナリ、トアヤシム計リノ事ニ御座候。扨、其川端ノ邸地三百坪、大隈氏ノ媒介ニテ、私方ヘ合併ニ相成、夫故、一旦ノ見込トハ、自然ト費財も相フヱ候得共、凡完全ノ場ト相成申候、是、全、御庇陰ニヨル所ナレド、スコシ生輩ノ居宅ニハ豁大スギル様ニテ、御叱リモ如何アランヤトハ存候ヘ共、マヅ〳〵ヤラカセデタードー図面ノ結構ニ相成申候。十月下旬御出京トノ御事故、其御出ヲト、今ヨリ指ヲ屈シ、御待申上候。

一　今度、森山家御家扶、御地ヘ御引纏メ、然ルニ、御小児モアヘナク遠行。実ニ残念無云計。此孩児タル、実ニ、生輩、是迄多ク見ザル所ノ玉児子ニテ、桐陰先生ハ勿論、御一同ニモ、御一目アラバ、嘸カシト存ル計ナルシガ、誠、残心ノ至ニ存候。

一　大隈家盆栽云々御示諭ノ旨、致披露候処、何様、十月御出ヲ待ツテ、ホコラント相楽ミ居ル、ト申上候様ニトノ笑ラヒ出シニ御座候。扨、同氏モ本月廿三日より、アタミ（熱海）ヘ入湯ニ出掛ケラレ、到底十月上旬ニナラサレバ、帰京ハセラレズト存候。

一　西南ノ賊焔も、已ニ萎麼、弥、窘迫セシガ、昨夕警視局ヘノ電報ニヨレバ、降伏人ノ説ニ、西郷・桐野ハ力尽果候ハヾ、縦容縛ニ就クベキ決心ナルヨシ、キコユトアリタリ。是レ、蓋シ、西郷ハ那翁ノ轍ヲ履ムノカ、将タ、彼ノ口実トセシ所ノ、烏有事ノ吟味ヲ鳴ラスノ積リカ。何様、其意ノ在ル所、難理解事共ニ御座候。

○曾テ、一参議ノ咄シニ、今度ノ失費高三千万円ニテ、結局ヲナスニ余レリト。但シ、従来、海陸軍備ノ品ハ、此外ナリトノコト。

○高智（知）連中、臨時ニテ、糺問最中ナルガ、未ダ板垣輩ニ、連及スベキ端緒ナキヨシ。但シ、到底ハ、イヅレニ迄波及スルヤ、予図シガタシ、ト其掛リノ者ノ密話ニ有之候。

○伊丹も、召ニよりて、出京ニ相成候事故、自分も、余程退隠ノ決意ニ有之由ナレド、夫是、氷解ニナリテ、此節ハ、当人も、色ヲ改メタリゲ也、依テ、不遠、機嫌克、帰住スベシトオモハル。

○土居ノ事も、段々ノ云々ニ有之候処、此度尾崎判事帰京、申談ジ、遂ニ、同人より昇級ノ申出ニ相成タリシニ、卿云、已ニ昨年ニ、一級ノボスル積リナリシガ、此外ニも、石井・松岡・荒木等ノ輩有之ニ付、一同ニト云フ内改正ノ事起リ、夫故、追随今ニ及ベリ。到底昇スベシトイヘドモ、年歴等ニテハヤラレズ、イズレ年内ニハト申事ノ由。依テ、本人ニも待遠クハアルナレドモ、暫クノ堪ヘユヘ、退屈放心セズト、弥以、勉強油断ナキ様ニ、御示教被成遣度奉存候。ケ様ノコト、本人ヘ文通スルト、又々何トカカトカ、苦情コヾトヲ言越ス故、私よりハ何モ不申遣候間、宜御含置奉願候。先ハ、今一応ノ拝答、旁、御無音御詫ト家作ノ諭報迄、如此御座候。敬具

八月廿九日（明治一〇）　　はる房（北島治房）

松陰大人

資料4　籠手田安定書簡五代友厚宛

副啓、被為懸貴意ニ、去ル三日御勅発、鹿児島表云々承知仕候。然ルニ本日川路大警視電報、幷西京槇村ヨリノ通知ヲ以見レバ、鹿児島表開戦中、官軍追々援兵到着、県令モ帰県、官軍大丈夫ノ由、御互ニ抃賀ノ至ナリ。抑、延岡敗軍ノ後、賊は豊後・肥後ニ出ルノ景況ヲナシテ、不意に鹿児島ニ出ルハ必然ナリト、安定ハ公然明言セリ。果シテ愚言ノ通リ也。参軍先生、固ヨリ是等ノコト、油断ハ無之筈也。乍然、鹿児島表今度ノ一件ヲ見レバ、聊、手抜アルモノヽ如シ。後世、西郷ヲシテ直段ヲ増サセ、参軍ノ直段ヲ下ルト云フモ、不当ニハ非ザル可シ。昔、徳川家康、関ヶ原大勝利ノ節、戦終リテ後、左右ノ者ヲ呼ンデ、殊更ニ兜ヲ着シタレバ、左右ノ者大ニ不審ヲ生ジ、敵敗ル、ノ後ニ至リ、何故ニ兜ヲ着シ玉フカト尋ネタレバ、家康云ク、勝テ兜ノ緒ヲ締ムルトハ是ナリト、笑ヲ含ンデ答ヘタリト。其意ヲ用フル深シト云フ可シ。是、三百余年ノ治ヲ出スノ根本ナラン。仰ギ願クハ、上朝廷ヨリ下参軍ニ至ルマデ、家康ノ意ヲ了解アラセラレンコトヲ、不堪千祈万禱ノ至也。

明治十年九月五日　　安定拝

五代友厚　　籠手田安定

資料5　平岡凞一書簡五代友厚宛

任幸便拝啓。秋冷の気御座候。益、御清穆奉賀上候。遠境、兎角御疎遠打過、御解恕奉願候。御旧県ノ動揺、初ハ鎮定不及、御厚配ニも懸居候件と、想像仕候。是以、敢て、官兵の勇策無キニ不有、又西郷・桐野の勇策有ニ不有。以為、時こそ可中。併、人民の死傷ハ、誠ニ可憐。其、西郷ニ、帰着スルナルベシ。

○鉱山・製藍の御事業、如何御座候や。頗、御案事申上、乍不及事、岩瀬ニも尋、世上ノ浮評も打消し、只管、御盛業ヲ祈候処ニ御座候。但、尊慮高案、私輩の及処ニ非ト雖、老婆心ニ考ル時ハ、任ズル人御撰定肝要ニ御座候。方法目算ニ、尚、不詰リノ事ハ無之モノ、又有らバ、人も用ひざるハ申迄も無之、只、其事ヲ行ヒ成スハ、人ニ因と奉存候間、此上御注目奉祈候。

○小野も、好家名相立、其辺ハ過般も申上候通、善右衛門縷術可仕。就てハ、上州富岡製糸場の義、是迄官ニて御世話有之候処、得失ハ先差置、製業ハ十分ニ成就セシニ付、人民所有ニスベキノ評議決定ニ付、私へも内意申越候趣有之候間、小野組も、一反、官民の間に、不都合ヲ生じ候モノモ、既ニ家名再興ニ付、同家ニ関渉為致、一ハ公国最第一ニ物産盛隆、二ハ人民ノ深宜ヲ附セ度と、表面ハ、私、御払下願人、金銀差繰、小野事業ハ、速水堅曹、及応援スルニ、二本松ノ佐野理八・肥後ノ長野・越後ノ星野抔ニて、取扱候積ニて取懸候処、少敷云々有之、一反、私御断申上候処、小野善右衛門・速水堅曹等より、追々熟談の都合も御座候ニ付、尚又、再び御払下の義、松方大輔殿迄申出候。就てハ、巨細善右衛門よりも御聞被下、宜御加勢被成下度、此段伏て奉願候。右私用迄、此段申上候。早々謹言

九月十一日（明治一〇）　　平岡熙一

松陰賢台　閣下

資料6　五代宗太郎書簡五代友厚宛

尚々、此内より書状等可差上候処、方々へ相越し居候て、乍存、不埒仕候段、真平御用捨可被下候。且、此節、私学校人数出軍ニは、私ニは出兵仕不申候。此節の変動ニ付ては、父上様ニも、深く御込り居被遊候付、本文ニ御願申上候儀は、幾重ニも宜御願申上候。尤、父上様ニも、頃日は、甚、力弱ニ御成被遊、始終御服薬ニて御座候。一統、世話ニ相考居申事ニ御座候。当分は、温泉へ御越し居被遊候。一筆啓上仕候。追々、秋冷相催申候処、益、御機嫌能可被有遊御座、恐悦至極、目出度奉存上候。於爰許も、父上様を初上、家内中一統、無事罷在候間、乍恐、易尊意思召可被候。扨、御聞及も候半、爰許ニも、此節の変動ニハ、上下の町家は勿論、武士小路も無残焦土と罷成、私方ニも最初の騒動ニ焼失仕、乍漸、木屋掛等仕居候処、又候、残徒の面々馳帰り候故、直様、官軍差入相成、大騒動ニ相成、城ヶ谷・岩崎は賊巣ニ被成候付、家内中其儘相逃し、諸道具等も取出シ方相調不申、夫故、丸焼ニ相及び、実ニ歎ヶ敷儀、御推察被遊可被下候。就ては、行先キ何様可仕やと、御両親初、一統の歎ニ御座候間、御賢慮を以、金百五拾円位も、御合力被遊被下候儀は、相叶申間敷や、乍恐、私より奉歎願候。尤、米・味噌・醤油等も焼失仕、勿論、皆々の着類等も焼失仕候付、只今より難儀仕候間、反物も何卒壱、弐反ニても、御下し被下度、幾重ニも奉拝願候。先は此等の段申上度、如斯御座候也

九月十六日（明治一〇）　　五代宗太郎

五代才助　様

資料7　五代宗太郎書簡五代友厚宛

一筆啓上仕候。時分柄、冷気相催候処、益、御機嫌克、被遊御座候半、愛度御儀、恐悦至極奉存候。随て、私儀も、依旧、碌々瓦全罷在申候間、乍恐、御意易思召可被下候。二二、当地の儀、御存の通、賊蜂起以来、一日も寧日無之候ノミナラズ、彼等田原・八代辺敗走以来、頻ニ兵を募り、十五才以上四拾余歳迄ハ、大概、賊名を蒙り申候。乍然、私儀は、二之丸様御供いたし、桜島の様相渡居申候処、幸、募兵の難ハ相遁（ノガ）り申候。然処、二度、賊兵、鹿児島の様逃帰り候節は、此前、丸焼けニ逢ひ、乍漸木屋がけ致し居、未ダ出来上り不申候内ニて有之候処、不思寄事故、二之丸様御供ニても仕、桜島へ相渡候隙無之、殊ニ、父上様御病気ニて有之候処、進退相究り、乍漸、宅の後、穴の中へ入り、看病いたし居、四日計りは罷在申候得共、砲丸、頭の上ニて数度相発シ、殊ニ小銃は雨の降ル如ク、中々凌（シノ）ギがたく有之候処より、四日目ニ、漸ク賊地を逃出申候て、華野村へ借家仕居申候。然処、去ル廿四日、賊魁西郷隆盛・桐野利秋始メ、其外スベテ相倒（タフレ）申候間、是丈ハ安心仕申候得共、何分、右申上候如ク、丸焼ニて、身すがら逃出し候事ニて、追々、冬向キにも相成候得共、不断（フダンギ）衣の衣裳も無之位ニて、且、味噌・醤油も取入、其上、物価高直ニて、必死、困窮仕申候間、実以、恐縮の至奉存候得

共、金子少々ニても宜敷御座候間、頂戴被仰付被下候儀、御叶被下
間敷や。

九月廿七日（明治一〇）　　五代宗太郎

五代才助様侍史

資料8　税所篤書簡五代友厚宛

打堪、御疎潤罷過候処、秋気漸催、益、御多祥、奉抃賀候。陳者、
横浜・神戸よりして、御地、虎列羅病伝満、扨々、苦々敷次第。過
日来、予防薬ニ用立、八方求手仕候処、硫酸鉄沢山御所蔵の由、則、
疫疾掛へ相通候処、是迄、造幣寮より申受候得共、中々、堺辺ニ十
分手入不申、甚困却の由御座候間、千斤丈、御配分被成下度。左候
て、明朝、此方より為受取（に）参上可申候間、其御掛へ御指揮置
可被成候。付ては、今日、百斤丈、態々、御遣し被下、難有拝受仕
候。夫々、吉田初メへ配分可仕候。先は、右御礼答迄、匆々恐惶
頓首

廿八日（明治一〇・九）　　篤（税所）

松陰老呈

西南も鎮定御同慶。
且東京は皇子降誕、千秋万歳奉恐寿候。再拝

此頃、何かと繁用。吉田も巡回、近頃帰り、又、拙ニも、近日より
出郊候。益、悪疫ハ流行、両便也。依て、上坂も此後取止申候。

資料9　五代友厚書簡大久保利通宛

秋冷相催候処、愈御仕栄、御奉職可被成御座、奉恐欣候。随て、迂
生無異消光仕候間、乍恐、御放念被下度。陳ば、御袂別以来、乍存
無申訳、御無沙汰申上居、恐縮の至リニ不堪、実は秋来、家業の一
事、西南の田原坂・植木辺ニ戦の景機、当春、支那へ見本差遣候処、
支那流の染業ニハ、精々藍溶解いたし候より、支那人大ニ希望を為
候趣ニ付、当夏、売捌の為派出為致候処、其節に至り、支那染ニて
溶解不致、夫故に、支那人も買請候運ニ不相成、不得止、派出の者
帰朝いたし候次第ニ御座候。然るニ、当夏は支那風の染を為得、当
夏ニ至、支那流の染業不出来とは、全、弐ケ条の失策、彼是を不知
より生じ候儀ニて、尓後、於当館、支那風の染業を研究致候外（無
之）と見込候付、頗、勉励を始め、能々研究仕候処、過日来、充分
の功を奏し、支那風染法、当館の各種藍を用ひ、五種に区別を立、
染業の方法を支那流ニ定め、既ニ一昨日、飛脚船三名派出為致申候
間、此節ハ必ズ実功を奏可申、粗、安心の眉を開申候間、乍恐、御
同慶被下度。乍末毫、西南の始末も、愈鎮静の形ニ至リ、積年の御
苦慮は、最早一解の夢ニ帰し、全国の其幸不過之、高島・川村等追々
尋来、戦景詳細伝承仕候事ニ御座候。迂生にも、当月下旬、支那の
吉左右を得、御土産と為し出京可仕候間、其上百事御咄可申上候得
共、其内、余の御不沙汰を謝し、且乍延期、西南の鎮定を奉賀度、
恐々如此御座候。頓首敬白

十月九日（明治一〇）　　松陰生

甲東尊台　侍史

資料10　邢答院重之書簡五代友厚宛

此書中、御一覧の上は、御火中奉希候。

一　先般、私学校人員上京の節ハ、兼て申上置候通、決て不与（くみと）の心得ニ候処、勢、不止得時機ニ立至、私ニは、牛根錫山より帰家、翌日出立仕候付、本年二月十五日、当県出立、熊本県下迄差越候処、豈計ランヤ、無躰の戦争相成、出兵致候上は、差急の論は、今更無益、斃て止マント相決し、腰折レ一首詞書シテ

○一筋に斃れつくさぬ大丈夫の、こころや更に大君の為め。

又、古郷なる武熊・武二・武三の三子へ、一首を送り侍る。

○先がけて大丈夫武雄と早なりて、くにのみたてと成るぞ頼まむ。

右両首を、今更、御目に奉懸も、可笑儀に候得共、其節の決死御察可被下候。夫より、所謂、田原等諸所の難戦数十ヲ経、弾丸雨集も間ニ奔走候得共、幸ニシテ、一ケ所の薄手モ不負、然内、五月三日、又々当県の様進発、其後、上伊敷村敗の節、隊と隔絶セラレ、諸所へ潜伏の折、白川村と南言（なん）ふ所ニ宿リて、

名のミにて関もなけれど落人の
心ぼそくや白川の里

と相録、五十七日の間、野に山に伏シ、雨露に打たれ、断食三昼夜半にも及し事も有之。

一　先般、兵乱の節ハ、当県下初戦の節ハ、私ニは出兵跡、御存通、女子共更（さら）ニて、家財等纔ニ持出、漸々、近村へ相逃、夫より遠村方々へ相逃、千辛万苦いたし候由。乍併、全家兵災ニ不係、皆々無事家屋幷家財等ハ焼失。其後、興国寺跡学校内へ借宅、少々運出得家財等、遠在より取寄置、もふハ、当県下は無事と相考　居候（中略）

一　疾、御聞知通、城之山落去ニ付て、西郷氏・桂家杯ニも、都て十七名、本営人員戦死被成候由。其他、打死・降伏等、数百名の由。扨、桂家子息の兵吉殿ニも、城之山ニて戦死、死骸も不相知やニ風聞承申候。同家親類衆ニも、未、都て、遠郷へ被逃居候由ニ付、尚、追々聞合可申上候。

一　篠原氏御甥清広殿ニは、未、幼年ニて出兵相成不申、御安心可被成下候。

右の外、追々聞合の上、細事可申上候。遠村より出涯ニ付、未、細事相分不申候。

十月二十五日（明治一〇）　　重之（邢答院）

友厚高兄

参考文献

芳即正「斉彬から大久保へ―薩摩近代化路線の発展―」
犬塚孝明「薩摩の生んだ国際人―寺島・五代・森―」
（以上企画特別展図録論文）
犬塚孝明著『寺島宗則』『森有礼』（吉川弘文館）
宮本又次著『五代友厚伝』
日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第一・四巻
鹿児島県教育委員会編『鹿児島県教育史』